

神は純粹な心を愛する

抜粹

今朝起こったこととお話ししましょう。私はアーシュラムの廊下を歩いていました。すると、ある部屋のドアが開いていて、中を見ると、ベッドの上にたくさんの本が積まれていました。本当にたくさんの本と書類の山があったのです。私は興味をそそられました。

しばらくの間そこに立ち止まり、部屋の中にいる人の注意を引くため、静かにドアをノックしました。そこにいたのは教授の一人でした。彼は腕いっぱい本を抱え、身をかがめていましたが、ノックの音を聞き顔を上げたので、メガネが鼻にずり落ちました。彼はいかにも教授がそうするように、レンズ越しに私をじっと見て、「これは、これは」と言いました。

私は彼に調子はどうかと尋ね、彼は親切に答えてくれました。自分の感じていることや人生で起こっているあらゆる出来事を語り始めたのです。彼が話している時、突然シルディのサイ・バーバの顔が現れました。それを見た時、私は、今朝瞑想から出てくる時に全く同じことが起こったのを思い出しました。

シルディのサイ・バーバの顔はとても明るく、きらめくような白さで、目もくらむばかりでした。サイ・バーバは私に、彼の本拠地シルディの町で歌われている朝の祈り「パードゥカー・アーラティー」を歌うように言いました。

皆さんの中には、シルディのサイ・バーバを知らない人もいるでしょう。彼は 19 世紀から 20 世紀にかけて、インドのマハーラーシュトラ州に住んでいた偉大な聖人でした。今でも何百万人もの人が、彼の埋葬されているシュラインを訪れるためにシルディに行き、多くの人が信じられないような祝福を受け取っています。サイ・バーバのことを考えるだけで、彼の祝福を呼び起こすのに十分です。

瞑想中に彼が現れ、この特別の祈りを歌うように言った時、私は残念ながら、「そらで歌えません」と言いました。サイ・バーバは再び、「歌いなさい」と言いました。

そこで、私は瞑想の中でこの祈りが書かれているはずの紙切れを探し始めました。しかし、どこにも見つけることができません。そうこうしているうちに、私は瞑想から出てきました。

こうして数時間後、教授の部屋のドアの前に立っていると再びサイ・バーバの顔が現れたのです。教授は穏やかに、丁寧に、優しく、愛情を込めて話し続けました。私は教授の顔に重なって見えるシルディのサイ・バーバの顔を見続けていました。心の中で、私はサイ・バーバに尋ねました。「今日はどうしてこのように姿を現し続けるのですか」

すると彼は答えました。「恐れのない心。それが私が人々に与えるものだ。恐れのない心」

教授が話し終えた時、サイ・バーバの顔も消えました。私は別れを告げて立ち去りました。サイ・バーバは、今晚私が恐れのない心について皆さんに話を知っていたに違いありません。

